

マルタ共和国での活動報告

留学先:マルタ共和国

高橋 采芳

1. はじめに

私は2026年1月24日から2月7日までの2週間、マルタ共和国での語学留学に参加しました。今回の留学の大きな目的は、英語力を向上させること、多国籍な人々との交流や難民・移民支援の現状を学ぶことでした。私は将来、日本で暮らす外国の方々と地域住民が、言葉の壁を越えて支え合える社会を作りたいという夢を持っています。日本を出たことがなかった私にとって、この2週間はすべてが新しい発見の連続でした。ここで得た経験と、埼玉親善大使として現地の仲間に伝えた埼玉の魅力について報告していきます。

2. マルタ共和国とは

マルタ共和国は、地中海の真ん中に浮かぶとても小さな島国です。「文明の十字路口」と呼ばれる歴史を持っていて、ヨーロッパ、アフリカ、中東の文化が混ざり合った、独特で不思議な魅力がある国でした。首都バレッタの街並みは、ハチミツ色の石造りの建物が並んでいて、どこを切り取っても絵画のように美しかったです。

3. 現地で伝えた埼玉県の魅力

私は今回の留学に「埼玉親善大使」としての誇りを持って臨みました。私が特に強調したのは、埼玉県の「住みやすさ」です。都心に近いのに、生活費が抑えられること、東京のすぐ隣にあり、電車一本でどこへでも行ける利便性があるが、家賃や物価が安くて暮らしやすいことを話しました。また、自然と街のバランスが良く、都会的な場所もあれば、少し行けば豊かな自然がある埼玉の風景についても紹介しました。実際に写真を診てもらったところ、「日本に行ったらぜひ住んでみたい」と興味を持ってくれました。他にも、外国の方へのサポートが整っており、埼玉県国際交流協会が多言語で相談に乗ってくれるなど、受け入れ体制が整っていることを伝えました。

4. 現地での生活と、人々の温かさ

4-1. マルタの人たちの国民性

マルタでの生活で一番心に残っているのは、人々の優しさです。日本から出たことがなかった私は、最初は緊張してばかりでした。しかし、バスでよろけた時にすぐに席を譲ってくれた方や、雨で滑りやすくなった道で「気をつけてね」と声をかけてくれた通りすがりの方など、見知らぬ私に対しても家族のように接してくれる温かさに何度も救われました。自分が大変な時こそ、隣の人を思いやるというマルタの国民性に触れ、私が目指すべき「支え合える社会」のヒントを教えてもらった気がします。

4-2. 難民支援から学んだこと

私は語学の勉強だけでなく、現地の難民支援の仕組みについても着目し留学をおこなっていました。マルタでは、教会やNGOが中心となって、生活に困っている難民の方々に食事やシェルターを無料で提供しています。学校の講師の方に詳しく伺うと、単純に助けるだけでなく、仕事を探す手伝いや言葉の教育など、彼らが「社会の一員」として生きていけるようなサポートが国全体で行われていることがわかりました。

5. まとめと将来の展望

今回の留学は、私にとって決して簡単な道のりではありませんでした。母子家庭ということもあり、経済的に留学は難しいと思っていましたが、どうしても諦めきれず、埼玉県奨学金制度に応募しました。一度は落選してしまい、とても悔しい思いをしましたが、そこで諦めずに自分の計画を見直し、再挑戦してこのチャンスを掴むことができました。この経験から、初から自分の可能性を決めつけず、挑戦し続けることの重要性を学ぶことができました。帰国した今、私はマルタで学んだ「感謝の心」と「多様な価値観」を大切にしたいと思っています。埼玉県には今、20万人を超える外国の方々が暮らしています。言葉や文化の違いで悩んでいる人たちがいたら、私がマルタで受けた優しさを、今度は私が埼玉で返していきたいです。英語というツールを使って、地域の人と外国の人を繋ぐ「架け橋」になり、誰もが安心して暮らせる埼玉県を作っていきたいです。

